

主 な 記 事

* 毒語
* 続坐禪
* 住職学特集
* 非行少年を扱う
* 劇団パンタカ
* 仏教テレビオン
相談

青年僧よ 立ちあがれ、歩め!!

発行所
臨濟宗青年僧の会
発行人 宮田正勝
〒420 静岡市御幸町11の4
TEL 0542-51-1312
〒振替 横浜 2-16960

不 二

出家時の約束

大学を中退して禅僧になる決心をした時、師は「二つのことを厳守してくれ、もしこの二つが約束できなかったら出家しない方がいい」と言われました。一つ、修行成就まで僧堂を退かぬこと。一つ、妻帯せざること。「どうだ」「守ります」と言うことで僧堂へ掛搭しました。「世縁を絶って、身を法の為に捧げ、生涯修行を続けること、これを出家という」と言う極く当り前のことを遵守してくれたらしいということです。そして「これが履行できないようでは出家でもないし、禅僧でもない。分るか」「分ります」「じゃ男と男の約束だ」「約束します」という風な会話がありました。

僧堂在錫中には、生身の人間ですから色々なこともありました。病気になるって弱気になったこともありました。対人関係に悩まれたこともありました。女性問題もあって結婚しようと思ったこともありました。同参の人達が住職し、結婚



毒語

の通りであります。

「毒を知る」

し、子供を儲けてゆくの羨しく思ったこともありました。幼馴染や同窓生が次々と出世してゆくのを聞き、焦りを感じたこともありました。一人故郷に残して来た母のことも考えました。そして、一向に、修行上の埒があかない自分、とも

僧堂の同参の人が、昨年、一念発起して宗門の大学に入学しました。彼は妻もあり、彼女のお腹には赤ちゃんもありました。彼はそれらを振り切って大学に行

すれば易きにつこうとして真向に修行に取り組もうとしない自分に歯痒い思いをした時もありました。そういう弱い自分に鞭うってくれたものは、やはり最初の約束でした。男と男の約束の絆を断ち切ることは、男として決して潔いことではないという気持でした。

生涯修行

先年、ようやく僧堂を退かせて貰いました。その時最初に感じたのは、これからが本当の修行の始まりである、今、やつとその入口に立っている、ということでした。僧堂での参禅入室が了ったところで、又新しく別のそれが始まっていることに気づきました。五祖法演禅師の「我れ参ずること二十年、今、方に毒を知る」という言葉の意味が、この頃になって真に分って来ました。今から学ばなければならぬこと、やらなければならぬことが山積しています。大燈国師「示衆法語」の、「只須らく十二時中、無理会の処に向つて窮め来り窮め去るべし」

きました。僧堂を出て、一ヶ寺の住職になったのですが、その時になって初めて自分の未熟さに気づいたというのです。時折、檀家の人が寺に来ます。「おっさん、般若心経」の「色即是空、空即是色」とはどういう意味や」と尋ねます。正直言つて、その真意が自分に分っていないから答えられない。又別の人が来ます。「おっさん、この軸物の讃に、柳は緑ならず、花は紅ならず」と書いてあるが、どういう意味や。柳は緑やないか、花は紅いやないか」これにも答えられない。年寄りが来ます。「わしはもう年とって坐禅なんかできへんが、それでも禅が分るか、禅で救われるか」と聞きます。

「衆生本来佛なり、というが、本来佛ならもう修行は要らんやないか」等々。彼は一応の説明をしますが、あくまでも説明であつて、肯心自ら許す底の答えでないことは自身よく分っている。彼は四十才を過ぎています。「もう一遍修行し直してみます。今のままでは禅僧といえ

永源僧堂師家

篠原大雄老師

せんから」

彼の「毒を知る」の心底、大阪少林寺匡道和尚再参の話の思い出させます。

——自ら引導して而かもそれが行き去りたる処を知らざる愚禿に与うるの財なしと、口を極めて痛罵し去る。此において、匡



道大いに憤激し、再び出でて遊方し、十余年を経て、始めて大事を了畢するを得たりきという——(近世禅林言行録)

出家して、出家の為すべきことを為さぬのはさびしいことです。禅僧と為つて、禅の何たるかが分っていないのもさびしいことです。そして、臨濟宗の宗徒でありながら、「臨濟録」にさえも参じたことがないとしたら、実にさびしい限りであります。

我が永源寺の開山寂室禅師に一つの逸話が残されています。

寂室、その徒に語りて言うは、「吾に緊要の一訣あり。秘密のことなれど、汝に付すべし。汝、毎旦晨に起きて、まず手を引きて頭顱を摩で、又目をもて袈裟を顧みて、心に念い口にいふべし。吾はこれ釈迦文佛の法孫の出家なり。たとい命を殞すとも、比丘の模範を失わじと。これ第一の覚悟なり」とぞ。

坐禅の意義

坐禅という言葉にあたるのはインドに古くからある言葉で、ヨーガといいます。ヨーガとは、集中された思考というのが一番代表的な意味で、これを梵語でサマーティといいます。あるいは、一点に思考を集中すること、というのでエーカチソノグラターといいます。ある一つのことをくり返しくり返し持続して行うことだから仏さまのことで、自分のことで、どんなことにもあきないでくり返してやっていると、どんなことでも見えてくる。頭のいい人が一回でやるよりも、それほど頭がよくなくてもくり返しやった方が尊いというようなお経がたくさんあります。

禅という言葉をとっていきますと、今申しましたように、あきないこと、くり返すこと、心がふらふらしないことなど、いろんな意味があります。

最後にサマーパッティという言葉がありますが、これは日本語で等持と書きます。京都に等持院というお寺があります。等しく持つ、それがサマーパッティです。凡夫は、心がいつも動いているわけです。朝起きた時は機嫌がよくても、ちよつとしたことで悪くなる人はよくいます。心がまだ等しく致る所にいていない。ですから仏さまの心は軽やかなのです。

『俱舍論』には、仏さまのお心は軽安だと書いてあります。これに対して、凡夫の気持は憎沈と掉挙だといいます。憎というのは、目の前が真暗になること、心がいづつも暗いことです。沈という字は、沈みがちな人のことをいう。だから憎沈というのは、いつも心が何かひつかかっ

ていて、ゆううつな顔をしている人のことをいうわけです。掉挙というのは、心がいづつも浮わつていてびんびんはねていることです。凡夫というのは、たいてい憎沈でなければ掉挙、掉挙でなければ憎沈、仏の軽安と違うゆえんだと説明してあります。坐禅の目的もこれではないかと思ひます。なぜ坐るのか。坐っている間に、一意専心仏さまの世界に近づける修行をしていくことによって、心を結んでいろいろなゆううつなことを、くだらないことがだんだんなくなるわけですから、そうすると、朗らかになつてきます。そしてしかも、うわつていない。憂鬱な人が憂鬱でなくなるのが仏教です。

坐禅の境地

物にしばらく世界のことを、無色定、無色界ともいいます。無色定というのはお悟りです。その世界を無色界といひます。皆さんには、ご自分の肉体があります。すると、痛いとか、楽だとか疲れたとか思ふけれども、本当に修行を積んでくると、足がしびれたということも忘れてくるし、まわりで雨が降っていることも忘れてきます。

無念無想というのは、そういう世界をいうわけです。その無色界の中に入つていってお悟りが得られるのが無色定ということです。こういう

坐 禅
東洋大学教授
金岡秀友 (Ⅱ)

境地はなかなか難しいけれども、それを四通り数えあげるといふのが、インドの世界でよく行われていたのです。四無色定といひます。皆さんがまだ暑い寒いといふのは、無色ではない色なのです。ところが、それがだんだん気にならなくなつてくると無色界に近づいてくわけです。しかも無色界にもいろいろな次第があるわけで、最初は空無辺処の悟りといひます。空無辺というのは、ものに捕われない、捕われたりさえないなければ広い世界が開けるといふわけです。だから、他人を気にしないような気持というのがまず第一歩です。自分と人を比較するから人間はどんな不幸になつていくわけです。二番目は、色無辺処定です。これは自分の持つている知識や知恵といふものを、無限の世界まで広げていくことです。自分の頭はいいと思へば、自分より劣る人には威張りだし、劣ると思へば今度は自分よりいい人の前では卑屈になる。そういうものを離れる。知恵といふのは、本来我、人共に幸せにするものでこれが本当の智慧で仏の智慧です。

三番目は無所有処定です。これは、俺のものだ、あれも欲しいこれも欲しい、という我欲を離れる境地をいひます。今の学校はずい分、無所有処定から離れていふと思う。私は、中学時代のんきにやつて、合間合間に勉強する程度でした。どこか余裕があつたように思ふ。学校も努力すれば、先生はほとんどん甲をふやして下さる。少し怠ければほとんどん丙や丁に下がる。自由競争ですがその代りに自由休息もあつた。今いう無所有処定というのは、学問しても、修行しても、

その目的効果をあせらないといふことなのです。お釈迦さまがこれを一番先に、アーラダーカラーマという師匠から教わつたのです。

最後は非想非非想処定といひます。非想といふのは、思うにあらずです。非非想といふのは、思うにあらずにあらずで二重否定です。別の言葉でいうと、何も考えなければいい。考えてはいけないうら死んでしまへばいいという虚無論ではないのです。そうかといつて、何でも考えていけばいいのかといつたら、今度は考えに考えたあげくゆううつになつてしまふ。本当の自由自在といふのは、考えていることにもこだわらない、考えないといふことにもこだわらない、それが軽安です。打てば響く、考える準備はいつでもしているけれども、私は考えてますよつていふ顔じゃないわけです。これがインドで考えた四つの坐禅の一番上です。

今、お釈迦さまが、アーラダーカラーマといふお師匠さまから、ものにこだわつてはいけないう、お悟りを開こうと思つて坐禅をするんじやないよと教わりました。それからウドラカラーマブトラといふ先生から、考えないといつて考えない方にこだわつてはいけないう。また考える方にもこだわらない。心にかかる雲もなしといふような気持で坐禅をしなさいと教わりました。

釈尊の苦行

その二人の先生から別れて、お釈迦さまは苦行林といふ所へ行きました。林の中へ入つて七年間苦行なされた。どういふ苦行をなさつたかといふと、断殺行といふて、殺物を口に入れない、いわゆる

注文仏像・紫檀製仏具・大木魚・大鑿子 一日本で初めて大きい“木魚”の大特価

ムナ カタ
宗 像 商 会
株式会社

本社 東京都東村山市富士見町3-2-17 東北支店 盛岡市中ノ橋通り2-4-16
〒189 ☎(0423) 95-8505 ☎(0196) 54-2916

1.8尺	85万	→	60万
2.0	120	→	85
2.1	135	→	95
2.2	150	→	105
2.5	210	→	150
2.6	240	→	170
2.8	330	→	230
3.0	450	→	300

セール実施中一

- (1)材 質 楠材
- (2)銘 宗隣
- (3)数量に限定があります。お早めにお問合せ下さい。
- (4)倍、座布団サービス。

断食です。それを七年間なさった。しかも、ただ食べなければいいというのではなくて、慈心を修して苦行をした。なぜ食べ物を食べないのが慈悲になるのか。皆さんがごはんを食べる時を思い出しになって頂きたい。米にも野菜にもみんな命があります。仏教的に考えれば、その命というのは仏さまになる性質、仏性というのがあるわけです。米にも野菜にも仏性がある。その仏性を食べるというのは、米を殺すということなのです。そうすると、申し訳ないとか、食べていいのかしらと考えるのが普通なのです。だから、お釈迦さまは食べないと決心された。仏を目指すものが無慈悲なことをしたならば、成仏できるはずがない、とお考えになってお釈迦さまは何にもめしあがらない。ただ木の芽だけを食べた。その木の芽を食べるのも最後にはおやめになった。芽は葉になるからというので枯れかけた葉だけを食べた。お釈迦さまはガリガリになったけれども、なお一点の煩惱があった。しかし、その一点の煩惱が残っているということ、やったことが無駄であったということは全然別です。そして、お釈迦さまはこれでは体がたないと思って、その林を出てきた。これが有名な出山の釈迦ということになるのです。山を出たお釈迦さまは、前正覚山で修行して、ここを最後の場所にしようとした。ところが、不思議なことにここで最後の坐禅に入ったら山がゆれ動いて、洞穴が崩れてきて坐禅を続けることができない。そこでお釈迦さまは、これは縁がないんだなと思ってその山を出ようとしたのです。そしたらその山の主である

竜が、お釈迦さまの前に現れて、おじぎをして、「折角縁があって、あなたがここでお悟りを開こうとしてくれたのに、縁がなくて残念です。せめて記念にあなたの姿をこの洞穴に残して下さい」といったそうです。すると、「よし」といってお釈迦さまは不思議な術で自分の影を留めた。その所を留影窟といいます。この留影窟はそれ以来、本当に仏心をそなえてこの跡を訪れた人には、ポイントとお釈迦さまの影が現れるというので大変な名所になっています。有名な玄奘三蔵がここを訪ねて、見えないといって残念がっています。

私がおこなうことをご紹介しますのも、仏教の古い經典には四諦八正道という方程式ばかり書いてあるのではないからです。こういう不思議なことが書いてある信ずるか信じないかではない。その意味を考えてあげたいかと思うのが、仏教の出発点だと思うのです。

悟りと供養

さて、それからお釈迦さまは、尼蓮河という河のほとりにある有名なブッタガヤという所に下りてこられた。その村一番の金持の娘のスジャータという娘さんが出てきて、お釈迦さまにお乳で煮たお粥をさし上げたわけですね。そのお粥をめし上って体力を回復されて、最後の坐禅に入られた。ここで一つ注意されたいのは、お釈迦さまは今までひたすらご自分の力で修行なさってきました。ところが、山を下りられてから他の人の供養というものが加わったということです。なぜ前正覚山で最後の坐禅に入ろうとした時、山がゆれ動いて修行ができなかつ

たか。その意味は、私なりに考えますと、結局これは坐禅の継続です。坐禅は尊いけれども、それによって我人共に救われるという積極的な一面をお釈迦さまは考えたのではないか、ですから竜一匹だけの所で、竜はお釈迦さまに対して供養はできない。そこで山を下りた。そしたらお粥を差し上げたり、一番やわらかい草で坐禅の場所をしつらえたりさまたまな供養があった。だから修行プラス供養というのが最後の坐禅の一つの特色です。坐禅ということの尊さと、坐禅をしている人を助けるということの尊さは、やはりわけて考えるべきじゃないでしょうか。そして、坐禅を続けていますと、いよいよ最後の晩がきました。この最後の晩を21日目と数えているお経が大体です。その最後の晩を三つに分けて書いてあります。初めの初夜分では禅定が修められたというのです。坐禅による心の安定が四段階ありまして、一番目が一断五種といて、争いの心、なまけの心、たわむ心、疑いの心、くよくよする心の五つが悪心がなくなつて、だんだん朗らかになっていく。そして二番目に心不放逸といって、心があつちこつちにばらばらにならない。そして清らかな静かな喜びが心の中にじわじわと湧き上ってくる。三番目に捨行清浄正念正慧。清らかだということにもとらわれなくなる。そしていつでも正しい精神集中と正しい智慧がでてくる。それから第四に、最後の正念清浄心は、いつでも一つところに集中して全体を包む清らかな雰囲気なのが大自然である、ということでお宵の口が終わる。夜中になりますと、三明六通というのが

得られる。三明というのは、宿命、天眼、漏尽の三つの正しい心で、宿命というのは、自分が今こうやって生きていくけども、自分はどうから来てどこへ行くのか、前世、後世を知る智慧です。天眼というのは、目で見えるだけでなくそれを超えたものの見方ができることをいいます。漏尽というのは、心の迷いのなくなることをいいます。六通というのは、三明に三通を加えて三明六通といい、他心通、他人の心がよくわかること、人の苦しみがよくわかることです。その次が天耳通、だまっている人の苦しみもわかるということです。そして、神足通、無精でないことです。ものぐさな仏さまなんているわけがないので必ずすぐやってくれます。そして夜のしらじら明けと共に、お釈迦さまの心に、四諦十二因縁八正道ということがひらめいたといえます。これがまともとしてできたわけです。ところが今までの仏教学の本は、どうも四諦八正道から始まるでしょ。これは結論が先だからどうもよくわからないのではないかと思います。無理な気がします。

しかし、草むしりをしないで草をむしる意味はわからない。食物を食したことのない人に食べ物のありがたさはわからない。体で仏さまに近づこうとしない人は、頭の中で仏さまを考えることはできるだろうけれども、体で仏さまに近づくことはできない。だから、どのご宗派であらうともインドの宗教で禅をいわないものはない。仏教で禅を尊ばないものはない。禅によって悟りを開かれたのはお釈迦さまですね。今日は私はそれを申し上げました。(文責編集子)

大般若経版元
仏書經典版元

ばい よう
貝葉書院

604 京都市中京区二条通木屋町西入
電話・(075) 231-0919 番
振替口座・京 都 7 5 5 番

貴重な御法衣の御用命は
各本山御用達
後藤新助法衣店

〒616
京都市右京区花園木辻南町22-10
電話 (075) 462-3915 番